２０１０年度　新・第1種公認審判員資格＜新規申請作文＞

山形県トライアスロン協会 第2種公認審判員　　高橋伊万夫
作文課題テーマ：トライアスロン競技の現状とこれからの発展に向けて

（１）トライアスロンの始まりと組織の進展
１９７４年サンディエゴで生まれたトライアスロンは、１９７８年かにはハワイアイアンマン大会そして１９８１年には皆生温泉にて初めて大会が開催され世間の注目を集めるようになった。この流れの中で国内では、８４年、８５年にトライアスロン団体（連盟、協会）や愛好グループ組織が発足し、激動ともいえる時期を経験した。これを社会的に認められる競技に育てた先人たちと共に、私自身が国内のトライアスロン発展の歴史との係わりを振り返りながら、数多くの会議そして大会現場で体験したことをまとめ考察した。

スポーツ競技の発展のためには、選手と大会そして競技団体が必要である。これらをつなぐものが各種基準や規則であろう。初期の時代には、競技団体が未成熟で大会開催も不安一杯であったことを記憶している。例えば、計測である。当時は現在のような安価で高性能なパソコンがなく、ストップウォッチを使っての計測が主流であった。タイミングチップなどもなく、計測したデータをパソコンに打ち替えての作業であった。必然的に記録にはミスが出るわ、選手からクレームを受けるわけでたいへんな思いをした。それが、時代の進展とともに計測ソフトも開発され、実にスムーズに行えるようになった。これがトライアスロンを進化させた功績は大きい。

さて、山形県トライアスロン協会は、１９９４年に大同団結して設立されたJTUに加盟し、１９９６年にはいち早く山形県体育協会に加盟した。JTU設立団体のなかでは第１号の県体協加盟であり、４７都道府県の県体協加盟を促進できた事を誇りに思っている。組織の成立が競技の安全に寄与していることは間違いない。これにより、運営が健全に行われることが、選手の信頼そして大会主催者そして協賛各社からの信頼につながり、発展が促される。技術・審判レベルの向上は必然でありながら、この組織充実を見落としてはならない。

その後、JTUも１９９８年に日本体育協会に加盟、１９９９年には社団法人化と、JOC 加盟を果たした。２００８年８月北京オリンピック女子では、井出選手が５位入賞を果たす。そして２０１０年１１月アジア大会での男女金銀メダル獲得と、短期間に急速な成長を遂げてきたことは先人たちの努力が報われた思いである。

このメダル獲得は審判業務にも大きな影響を与えた。まず世界の競技ルールを審判員が理解し、国内大会にも適用していかなければならないという機運が高まった。東北ブロック

においても、特に仙台大会では海外選手の参加が多く、日本選手への対応だけでは済まないことを実感した。また、海外選手の参加は、世界の競技力をまのあたりにするということからも審判員への影響は大きかった。海外選手が日本に来たら、日本語を理解するべきという考えもあるだろうが、ITUが指定する大会においてはそういう訳にはいかない。このため、ブロック内で外国語に対応できる審判員を養成しなければならない。このことは、スポーツを通じた国際交流というJTUの大きな方針にも合致したものである。

（２）競技規則の整備と社会認知

さて、１９９５年Triathlon Competition Rules Operations Manual “９５が５月に創刊され、トライアスロン競技規則・運営規則・公認審判規程が１冊のルールブックとして競技規則が運用されるようになった。JTU東北ブロックでも、仙台市で公認審判員講習会と認定試験を実施した。JTUから吉井講師（兼）試験官と私とで二日間に渡り、東北６県に公認審判員を育成し普及発展に精進してきた。

そして、２００８年に新潟国体、２００９年千葉国体がそれぞれ公開競技として開催され、これらが原動力となって２０１６年岩手国体から正式競技となることが決定した。国体が、４７都道府県を順々に回っていく事から、これまで大会のなかった地域には、開催に向けての取組に、強力な後押しが出来る。JTU及び加盟団体と直接関係のなかった大会との協力関係が進むだろう。国体開催が、その地域にもたらすのは、地元のトライアスリートの参加可能大会を一つ増やすだけには留まらない。審判や運営管理者、選手や指導者などの育成や組織化が図られる。

地元民や関係機関にとっては、トライアスロンに実際に接する事で、さわやかな感動を覚えるだろう。そして、格別な体力がなければ不可能と思われた鉄人イメージは払拭されるに違いない。これらによってトライアスロンに対する社会的な理解度を増すことが何よりも嬉しいことだ。

社会的な認知を得るということは、スポーツそのものが大きく発展するための基盤である。この発展につれて、選手ばかりではなく審判員そのものが社会人として立派な存在になることが大いに期待される。トライアスロン独自のルールが注目されるが、何回も強調されているように、社会常識がなければ公道や公的な施設を使うトライアスロンの存続は難しい。

これらのためには、競技者は、公正なスポーツ精神とフェアプレイ精神で競技し、社会人としての良識で対処し、自己の安全に責任を持ち、他選手の安全を損なう事なく、練習した力量を出しきる事である。又､審判員は競技ルールにのっとり、選手が競技を全力でする事が出来る様にアシストし、安全を最優先に、自己管理が出来なくなった選手を注意、警

告等、適切にアシストし、競技全体が応援者も含め、成功させる事が最大の目標となる。

（３）審判員の現状と将来展望

審判員はトライアスロンという競技の中では、非常に重要なポジションにいる。危険な行為を行う選手を停止させたり、失格にしたりする事が出来る立場にあるからだ。それだけでなく、レース中にコース内の危険を判断し競技者に注意を促し、未然に事故を防ぐ事も要求される。そのあるべき姿は、常に周囲を観察しあらゆる場面において冷静な判断を行うことだろう。私は技術代表・審判員としての経験は多数といえるが、試行錯誤の連続で満足感よりは反省と苦い思い出の連続であった。これらの経験を審判員業務での状況判断の材料としながらも、後輩たちの育成にも努めなければならないと考える。

現場からの経験でいえば、路面状況の不整備により転倒した選手から大会責任を問われたことがある。コースを自分で知り競技を行わなければならない規則にはなっているが、心が痛むことである。限定的な予算のなかで開催市町村との道路整備のため交渉を行っても限界がある。

対応すべきことは、コースの路面状況マップを作成し注意箇所をもう少し詳細に説明すべきであったろう。今日であれば、映像データによって注意を促せるだろう。後は審判員が選手を何としてでも守ってやろうという気概を持つことかもしれない。

今後のトライアスロンはテレビ放送の簡易化でさらにメジャー化していくと思われる。それにより、さらに多くの人達が参加してくることになるだろう。その中で審判員の役割は大きくなる。いい加減な気持ちで業務を行うおうとする審判員はいないが、スイム・バイク・ランが折り重なったトライアスロンから学ぶことは少なくない。テレビで思うことは、初期の時代の審判員が限定的なスポーツ競技のなかで許容されてきたことが広く知れ渡ってしまうことである。審判員の動作がテレビに映れば、これを嬉しく思う反面、視聴者からの反論にも対応しなければならなくなる。これらのことは課題として、審判員の質的向上のための材料としたい。

（４）審判員の裁定と期待

大会においては様々なルール違反、マナー違反が発生する。状況によって注意をする「ペナルティーを科す」「失格にする」などの裁定が発生する。審判員の視点は、選手が違反をしているのではなく、違反になっているか、いないかを問題としなければならない。一方で、故意の違反も見られるが、選手が故意か否かは、審判員の判断において大事な事である。競技コースや設定機材によってルール違反が生じることがあるからだ。

審判員は、全選手を信頼する事により大会が成立する事を基本に置くことが必要である。

違反になっていた選手を呼んで、違反になっていた事実の確認（危険回避の有無を含む）と注意、場合によってはペナルティーや失格の通告を行うことになるが、時折、対象選手の違反行為に対して叱責するかのような部面に遭遇する事がある。たとえ意図的に違反をしていたとしてもこのような行為は双方に後味の悪さを残すだけである。違反になっていた事についての丁重な説明と、今後の注意を促すことが肝要である。
初期の時代、カーボパーティがトライアスロン独自のものとして開催されていた。主催する側も何を出していいのか、予算はどうかなど手探りの状態が続いていた。この背景には大会参加費がマラソン大会などに比べ高額であったために、元を取りたい気持ちをあおっていたのではないかと反省する。大会開催の意義や実施における経費についても、もう少していねいな説明をしていれば、こんなことにはならなかったのではないだろうか。

選手、保護者、観客からの異議申し立てに対処する事はどの大会においても発生する事であり、審判員として真価を問われる場面だ。慎重かつ毅然とした対応が要求される。審判員の言動についてのクレームも少なくない中、選手、審判員、観客から受け入れられ、信頼される審判員もいる。人々を司る審判員の資質として、先ずは相手に敬意を払うことが、意義申し立てやクレームに対しての第一歩と実感している。

私は長い間、公認審判員育成に携わってきた。大会における審判業務も、トライアスロン大会で不特定多数の人々と接し、時としてトラブルも発生する。異議申し立てや苦情に対する対処に関して経験的に思う事は、いかに人の話を上手に聞けるかという事ではないだろうか、今後においても審判員の「傾聴力」は高めていきたいと思う大事なことである。

東北ブロックサーキット戦大会では、大会終了後、審判ミーティングが行われる。終了した大会における問題点、改善点などが報告され次回に活かされることになる。この時に良かった事を報告してくださいとお願いをするが、良かった事の報告は極めて少ない。改善点の指摘も提案も大事なことではあるが、最後のミーティングに自分の意見・感想を述べて、今後は大会実行委員会・主催者・関係者・選手。審判員・ボランティア・観客・あらゆる事に東北ブロックサーキット戦各大会に置ける問題点の改善活動に連携を取りながら対処していきたい。

（５）バイクドラフティングの功罪と対策
ドラフティングは大会ルールにおいて最も多く討議される部分であり、実際の大会においても問題が発生する。またどの大会でも競技説明時に必ずと言っていいほどドラフティングについてのルール順守が求められる。トライアスロンは、自然の中においての個人タイムトライアルとして、また自分自身のへのチャレンジとして外的援助を受けないで行うことが基本である。この了解事項のなかで、選手たちは実に楽しく意義深く継続性の高いス

ポーツを楽しんでいる。

しかしながら、見ていて面白くはないという意見にも耳を傾けなければならない。日本選手権は迫力あるドラフティングレースであり、ドラフティングレースがあった方がTV放送を見ていて面白いという意見を多く聞く。東北でも酒田おしん・仙台七ヶ浜大会ドラフティングフリーの大会が開催されるようになり、競技そのものに新しい魅力が加わった。

近年、テレビでW杯・日本選手権等トライアスロンを見て競技を始める選手も増えてきている。テレビ放映はほとんどがエリートのドラフティングレースであり、トライアスロンがドラフティング禁止競技である事を知らない選手が多い。集団走は禁止ですよ！と言われて戸惑う新人選手も意外に多い。日頃から、ドラフティングレースは特別なレースであり、一般大会はドラフティング禁止である事を競技団体や指導者が教示し、日常のトライアスロン大会での競技規則説明広報活動によってドラフティング行為は減少してきている。

大会当日の競技説明や要綱におけるコース説明だけでは選手も充分な対処は難しいかもしれない。ドラフティングになっている状況についても、コースの形態上やむを得ない場合、すぐに解除できない場合等さまざまな状況の中、審判としての裁定を行わなければならないが、現状ほとんどの大会においては安全優先と寛大な処理がなされている。

実際の大会時の審判業務においては、たとえば集団の中でキープレフトを守らず道路中央センターを断続的に走行しドラフティングを招く当該選手のナンバーを呼んでドラフティングの解消を求めるが、この行為を繰り返し、該当する選手には、固定マーシャルとも連携確認し相応のタイムペナルティーを科す。レース中注意した回数を告げた度合いによってペナルティーを与えた事を説明する。注意やペナルティーを科す場合は当該の選手に対しては客観性に基づいた、違反状態に対する充分な説明がなされなくてはならない。

ドラフティング防止ばかりに視点が向きがちであるが、公正なスポーツ精神とフェアプレイ精神を標榜する上では、ドーピング禁止と同じレベルの問題と考えることができるからだ。社会人としての常識で対処し、自己の安全に責任を持ち、他選手の安全を損なう事なく、ドラフティングの意味を理解しなければ、トライアスロンの社会的認知は充足しえないだろ。これらについて、選手を交えながら、審判員の仲間たちをおおいになる議論を続けていきたい考えるところだ。そして私は審判資格や年齢の上下にこだわることなく、関係者との議論を続けていけば、必ずトライアスロンの新たな発展の鍵が見つかると信じるものである。

**（６）今後への決意**

**私は、トライアスロンの審判員としてこの魅力にとりつかれて２１年間が過ぎた。長い年月を経ても熱い情熱を持って、年間平均５～６大会の技術代表や審判員そして実務をこなしてきた。これによって、大会主催運営の側として新たな世界が広がってきたように思える。山形県人の実直さと辛抱強さを心情に、審判員としても大会を支える沢山のボランティアや大会実行委員会・主催関とトライアスロン競技普及活動と信頼協力関係を築くための議論を続け、トライアスロンの新たな時代への一助となるよう努力していく覚悟である。**